

ペット飼育を考慮した都市整備上の課題の検討

大同工業大学大学院 学生員 ○伊藤 一馬
大同工業大学工学部 正会員 嶋田 喜昭

1. はじめに

近年、わが国ではペット（犬猫）飼育数の推計値が幼年人口（15歳未満人口）を上回った（図1）。そうした中、ペットを介した地域コミュニティがみられるが、一方で異臭等の衛生面の問題や泣き声等の騒音問題も発生している。

これまで、ペット飼育と都市整備に関する検討は十分になされてこなかったが、ペット飼育先進国である欧米諸国の事例を踏まえ、わが国でもペット飼育を考慮した都市のあり方について検討する必要性が高まってきているといえる。

そこで本研究は、ペット飼育と都市施設に関する住民意識調査・分析を行い、都市整備上の課題を検討するものである。

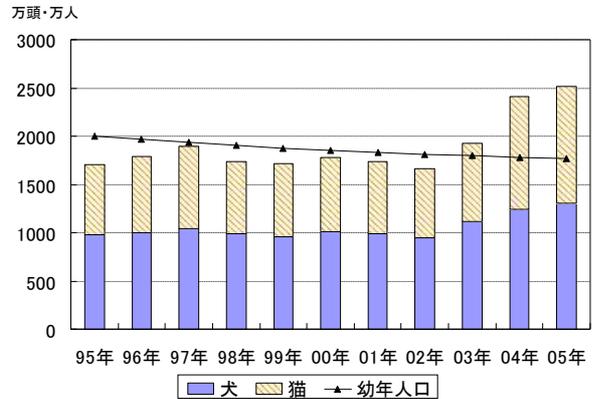


図1 幼年人口と犬猫飼育数

2. 意識調査の概要

2006年12月に、名古屋市南区（5学区）と豊田市五ヶ丘団地の住民を対象に意識調査を実施した。主な調査内容は、ペット飼育やそれに伴う政策、都市施設整備の意識等である。なお、本調査は、各地域において無作為に200世帯ずつの住戸を抽出し、配布郵送回収により実施した。計117世帯から117票（名古屋市：61票、豊田市：56票）の有効票を得、有効回収率は29%であった。

3. 意識調査の集計・分析結果

表1 回答者属性とペット飼育意識

(1) 回答者属性とペット飼育意識

回答者属性とペット飼育意識を表1に示す。ペット飼育経験者は79%となっており、動物好きは78%となっている。これらは内閣府の「動物愛護に関する世論調査(2003年)」と同様の結果である。また、ペットをコンパニオン・アニマル(家族の一員・仲間)と捉える意識が高まっているといえる。

項目	票数	比率	項目	票数	比率		
性別	男性	31	26.5%	ペット飼育意向	飼育中	53	45.3%
	女性	86	73.5%		飼育経験あり	39	33.3%
年齢	10・20歳代	7	6.0%		飼育希望なし	21	17.9%
	30歳代	13	11.1%	飼育希望あり・その他	4	3.5%	
	40歳代	36	30.8%	非常に好き	40	34.2%	
	50歳代	33	28.2%	どちらかといえば好き	51	43.6%	
	60歳代	19	16.2%	どちらでもない	25	21.4%	
	70歳代以降	9	7.7%	大嫌い	1	0.9%	
家族構成	1人暮らし	5	4.3%	コンパニオン・アニマル	61	54.0%	
	夫婦のみ	26	22.4%	愛玩道具	42	37.2%	
	二世帯	27	23.3%	モノ	2	1.8%	
	核家族	58	50.0%	その他	8	7.1%	

(2) ペット増加に伴う政策の必要性と具体策

ペット増加に伴う政策の必要性を聞いたところ、「政策が必要である」という意見が過半数を占めている。具体的政策については図2に示すように「飼い主のマナーを改善する」が最も多く、次に「ペット飼育に関する法規制を厳しくする」という意見が多なっている。ペット飼育のための都市整備の必要性は、あまり高くなく、ハード面よりもソフト面を改善すべきとの意識が高いことが伺える。

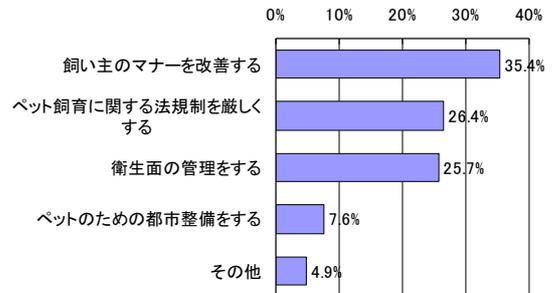


図2 具体的政策について (複数回答)

キーワード ペット飼育、都市施設、意識調査

連絡先 〒457-8532 愛知県名古屋市南区白水町40 大同工業大学工学部都市環境デザイン科 TEL052-612-5571

(3) 各種施設整備に対する意識

公共交通機関におけるペットの同伴規制について聞いたところ、「現況のままでよい」という意見が85%と多く、「規制を緩和すべき」という意見は8%と少なくなっている。

公園におけるドッグラン設置については、図3に示すとおり「必要である」という意見が多くなっている。また、ドッグラン設置における公的資金の導入について聞くと、「税金を使うなら必要ない」や「ペットを飼う人達で出資すべき」という意見が多くなっている。「税金を使ってでも必要」という意見が少ないことから、公的資金の導入に関しては慎重に検討する必要があるといえる。

また、各種店舗におけるペットの同伴規制について聞いたところ、「現状のままでよい」という意見が74%と多く、公共交通機関と同様に同伴規制についての不満を持っている人は少なくなっている。

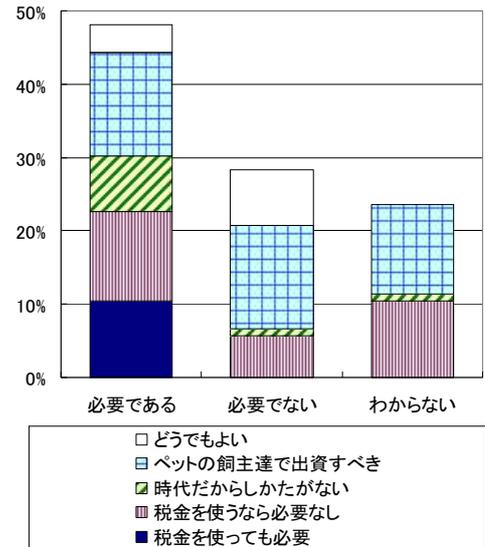


図3 ドッグランの必要性と資金について

(4) ペット飼育に関する不満

ペット非飼育者からペット飼育者への不満を聞いたところ、約4割が「不満がある」となっている。その多くは「フン尿の問題」や「泣き声の問題」である。特に多いのが「フンの後処理の仕方」である。

逆に、ペット飼育者からペット非飼育者への不満としては、「一部のマナーの悪いペット飼育者によって、ペット飼育者全体のマナーが悪いとは思わないでほしい」などの意見がみられる。

加えて、ペット飼育者から同じペット飼育者への不満として、「老若男女関わらずマナー（フンの後始末）が悪化してきている」や「散歩中にもかかわらず袋（後始末）を持っていない」などのマナー面での意見がある。

(5) 各回答と属性の関連性

ペット同伴による施設利用規制やペット飼育における政策の意識等について回答者属性との関連性をみたところ、表2に示す結果となった。特に、公共交通機関への同伴規制については、回答者属性により有意な差がみられる。また、飼育経験や好き嫌い、住居地区によって、ペットを通じてのコミュニティの有無に差異がみられる。

表2 各回答と属性との関連性 (χ²検定)

		性別	住居地区	年齢	職業	飼育経験の有無	動物の好き嫌い	動物(ペット)の存在意識
施設	公共交通機関への同伴規制について	◎		○	○	◎	◎	○
	ペットの店内同伴規制について	○		○				
	公園でのペット立入禁止規制について		◎					
	ドッグランの必要性について	○						
政策	ペットに対する政策について						◎	
	ペット専用施設への税金投入について					○		
その他	ペットを通じてのコミュニケーションの有無		○			◎	◎	◎

◎ : P<0.01 ○ : P<0.05

4. おわりに

本研究では、ペット飼育に関する政策や都市施設の整備について住民意識調査・分析を行った。その結果、ペット増加に対応する都市整備のニーズよりも、飼い主のマナーの改善などソフト面の充実が重要視されていることが明らかとなった。したがって、ペット飼育に関する法律や制度の見直し、徹底などを図ることが重要である。今後、欧米諸国の事例を踏まえ、わが国における具体的対策を検討していく必要があるといえる。

なお、本研究の遂行において当時学部4年生の佐藤裕一郎氏（現 株式会社平成建設）に多大な協力を得た。ここに記して感謝する。